

# 「青天井」の教えを胸に



「今も甲南の仲間を支えられている」と近藤康之さん

境で、先生のおおらかさに救われた。「人間としての器を育ててくれました」

会社でも、風通しの良

毎年初夏に灘高校(神戸市)とスポーツで競い合う「灘甲戦」は、運動部員にとって一大イベントだ。

空調設備などの設計・

施工会社、不二熱学工業社長の近藤康之さん(42、1993年卒)は、サッカー部員だった。勉強でかなわなくても、スポーツなら勝てると思っていたが、3年の時に負けた。

灘高は受験のため、灘甲戦が引退試合になる。甲南がどこか余裕を持って戦っていたのに対し、

灘はスカウティング(偵察)までする入念さ。「戦略で負けた」と感じ、悔しさがこみ上った。

6年間、皆勤するほど学校が好きだった。先生に自由に意見を言える環

クラシック音楽しか聴けなかったが、やんちゃグループの友人がザ・ブルーハーツを聴かせてくれた。衝撃的だった。その仲間とバンドを組むことになり、独学でピアノを始めた。

高2の時、阪神・淡路大震災が起きた。神戸市灘区の自宅は全壊。連絡が取れなかった同級生の死を、後日知った。「死に顔を見ても実感できなかった」

死と隣り合わせの経験をし、悔いなく生きたくなった。思いついたのは、始めたばかりのピアノで人々を明るくすること。町の集会所や喫茶店にキーボードを持参して演奏するうちに評判になった。

大学で友人とピアノデュオを結成。神戸ルミナリエでの演奏を見たパソナ創業者の南部靖之さん(38、96年卒)は「まじめな子もやんちゃな子も、お互いを認め合う文化があった」と振り返る。自ら会社を立ち上げるベンチャーの起業家である南部さんへの憧れが、今の仕事につながった。「甲南で教わったのは、



「自由な校風で、責任の重さを教わった」と小間裕康さん

限界を決めない『青天井』の考え。どこまでも目標を高く持ち、グローバルに戦える企業をめざした。(中塚慧)